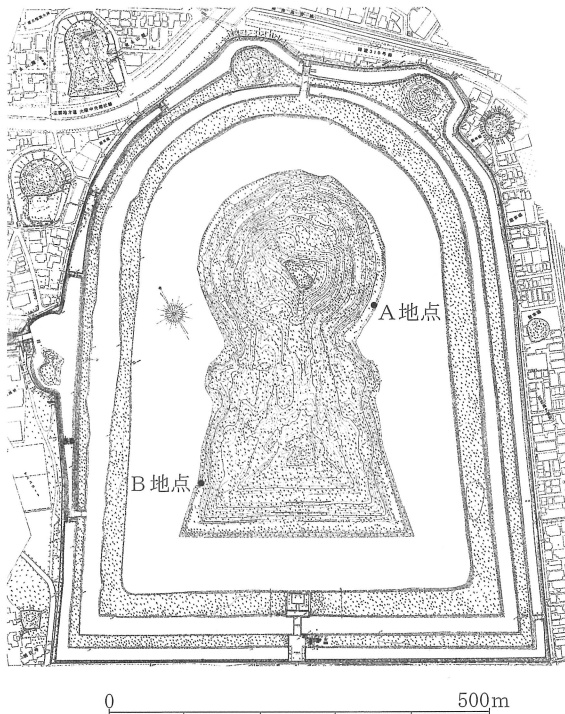


付編

仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵における採集品について

今回の立会調査における出土品ではないが、百舌鳥部事務所が所在する仁徳天皇百舌鳥耳原中陵を百舌鳥部職員が巡回中に、墳丘内において円筒埴輪が露出して崩落しかかっていることを確認した。そして、その処置に関する問合せが陵墓調査室にあったことから、百舌鳥部事務所建替工事に伴う立会調査のために百舌鳥部へ赴いた際に、現地にて出土位置などを確認したのちに該当する埴輪片を回収することとした。ここでは、その埴輪片（第76図1～3、5～7）を紹介するとともに、長らく古市陵墓監区事務所において保管されており出土地不明であった資料（第76図4）が当陵の出土品であることが判明したため、この機会にあわせて報告することとしたい。

1～3、5～7の採集位置は第76図に示したA地点であり、後円部東側の第1段テラス上の埴輪列を構成していた埴輪が露出したものと考えられる。1は口縁部を含む破片で、口径は約48cm、口縁部高は約11cm、突帯間隔は10.5cm前後である。口縁部の形状は端部を急激に外反させるものである。上から1～3段目の外面にはBc種ヨコハケがみられ、それより下段は板ナデ状の横方向の調整で静止痕がみられる。透孔は上から3・5段目に円形のものが穿たれている。一番上の段の外面にはヘラ記号とも考えられる線刻が、上から3段目外面には直弧文風の線刻がみられる。また、上から2条目の突帯下方では積み上げ休止ライン⁽¹⁾がみられる。2は胴部の破片で直径約45cm、突帯間隔約10.5cmである。いずれの段の外面も板ナデ状であり、一番上の段の外面には特徴的な線刻がみられる。3は底部を含む破片である。底径は約43cm、第1段高および突帯間隔は約10.5cmである。いずれの段の外面も横方向の板ナデ調整がほどこされている。また、第2



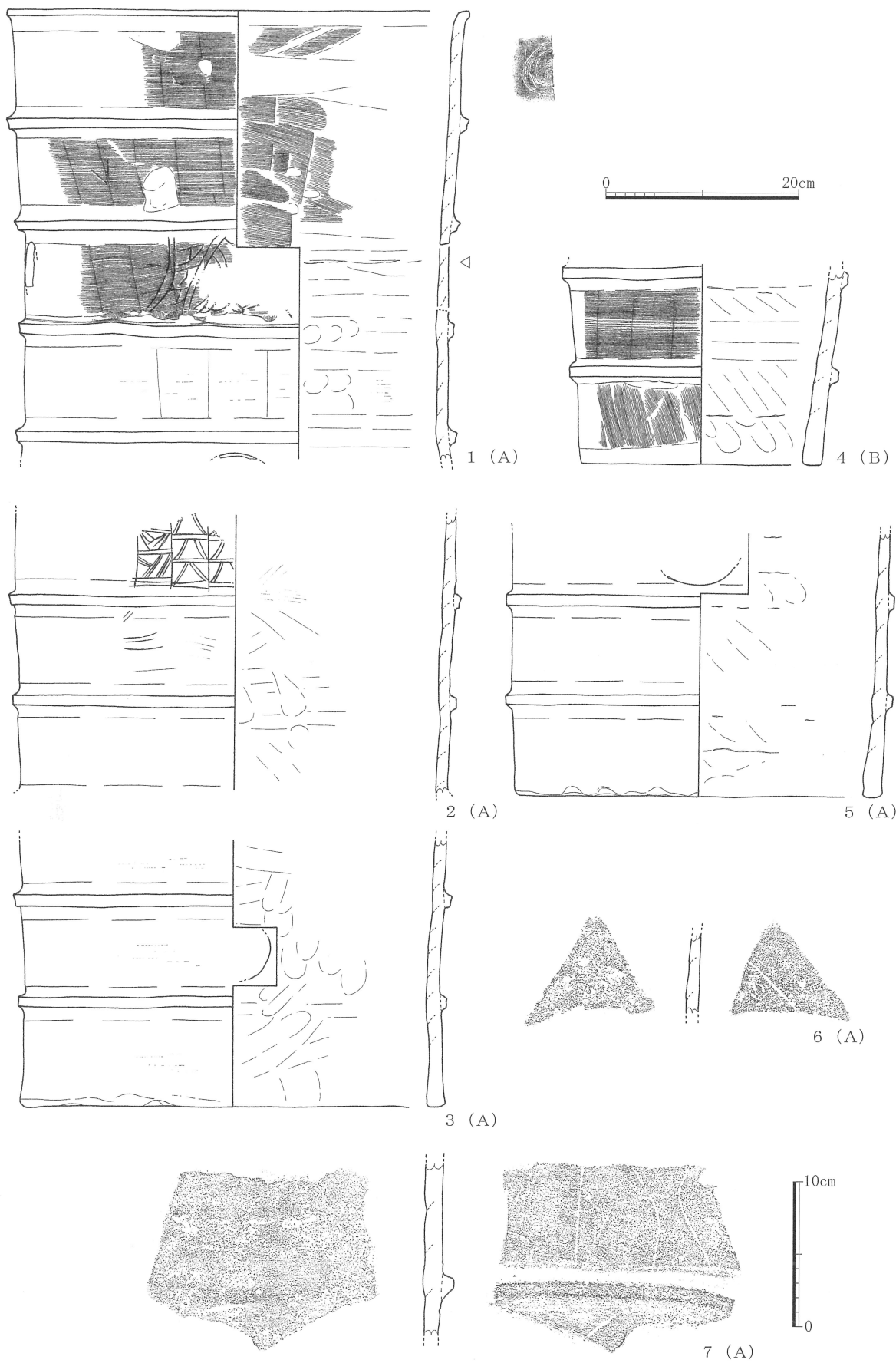
第75図 百舌鳥耳原中陵 埴輪採集箇所



1 A地点 埴輪露出状況



2 B地点 埴輪露出状況



第76図 百舌鳥耳原中陵 採集品実測図 円筒埴輪 (1/6、1/4)

段には円形の透孔が穿たれている。なお、1～3は同一個体である可能性が高い。

4は器壁外面に「御山内崩損復旧工事に際し33年1月13日」と書かれているが、これは昭和32(1957)年6月28日に豪雨によって仁徳天皇陵の一部が崩壊し、その復旧工事がおこなわれた期間に合致する。また、当時、現地で撮影された写真(第75図写真2)とも合致することから、これまで出土地不明として保管していた資料が仁徳天皇陵からの出土品であることが判明したものである。その採集位置は第75図に示したB地点で、前方部西側の第1段テラス上である。なお、書陵部収蔵資料の中には同様に「33年1月13日」と記された埴輪に応神天皇陵出土品としての注記がなされているが、これも当陵からの出土品の誤りである可能性が高い。この情報を元に応神天皇陵出土埴輪の様相が語られているとすれば、それは注意を要する。4は底部を含む破片で、底径約25cm、第1段高および突帯間隔は約10cmである。径が非常に小さい点の特徴である。外面調整は第1段がタテハケで、第2段がBc種ヨコハケである。

5は底部を含む破片で、底径約38cm、第1段高および突帯間隔約10.5cmである。外面調整は器壁が摩滅しており不明である。第3段には円形の透孔が穿たれている。6・7にも外面に線刻がみられる。

今回紹介した当陵の埴輪は前稿⁽²⁾において示した様相と齟齬をきたさないものであるが、今回の採集品には線刻を有するものの割合が多い点が特徴的である。なお、今回の採集品のような段間を埋めるような線刻をほどこす例は応神天皇陵周辺で出土する円筒埴輪に比較的多くみられる印象がある。(加藤)

註

- (1) 藤井幸司「円筒埴輪製作技術の復原的研究―窖窯焼成導入以降を中心に―」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会、2003年。
- (2) 加藤一郎「大山古墳の円筒埴輪―窖窯焼成導入以後における百舌鳥古墳群の円筒埴輪―」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』平成17～19年度科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕研究成果報告書、研究代表者：白石太一郎、奈良大学文学部文化財学科、2008年。